

● 高木 佐保 特定助教

Saho TAKAGI (Program-Specific Assistant Professor)

研究課題：ネコにおける「イヌ」化現象の解明

(Elucidating the phenomenon of “caninification” in cats)

専門分野：比較認知科学 (Comparative cognition)

受入先部局：人と社会の未来研究院 (Institute for the Future of Human Society)

前職の機関名：麻布大学／日本学術振興会 (Azabu University/JSPS)



私の専門は比較認知科学です。比較認知科学では、ヒトやヒト以外の動物の認知能力を相互に比較して心の進化を探ります。その中でも私はネコの認知能力について調べてきました。きっかけは、大学生の頃にネコを飼いはじめ、ネコの考えていることを科学的に知りたい！と強く思ったからです。これまでに、ネコが飼い主のことをどのように認識しているのかやヒトの言葉をどの程度理解しているのか、飼い主との愛着形成過程などの研究を行ってきました。

白眉研究員では、ネコにおける「イヌ」化現象の解明を行いたいと思っています。これまでの研究では、ネコはネコ1種として扱われてきましたが、そこには大きな多様性が隠されていると感じていました。最近の研究では、地域によってネコの人懐こさが異なるというデータが出てきています。特定の環境に適応する形で急速にイヌ化が進んでいるのかもしれません。その背景にあるメカニズム、ヒトとのコミュニケーション様式や認知能力の変化、文化的影響など多様な視点から研究していくたいと思っています。

My area of expertise is comparative cognitive science. This field involves comparing the cognitive abilities of humans and non-human animals to explore the evolution of the mind. Among these, I have focused on studying the cognitive abilities of cats. My interest began during my university days when I started having a cat and strongly felt the desire to scientifically understand what cats are thinking.

So far, my research has focused on how cats perceive their owners, the extent to which they understand human language, and the process of attachment formation with their owners.

As a Hakubi researcher, I aim to investigate the phenomenon of “dog-like” evolution in cats. In previous studies, cats have been treated as a single homogeneous species, but I have sensed that there is significant diversity hidden within. Recent studies have shown that cats' sociability toward humans varies by region, suggesting that rapid “dog-like” adaptations may be occurring in response to specific environments.

I plan to explore the underlying mechanisms behind this phenomenon from multiple perspectives, including changes in communication styles and cognitive abilities with humans, as well as cultural influences.

ネコとヒトの共生の歴史、イヌとの違い

現在、伴侶動物としての地位を確立しているイヌとネコ。両種は同じようにヒトの生活に入り込んでいるようにみえますが、ヒトとの共生の歴史は大きく異なります。ネコとヒトは約1万年前に出会ったといわれています。その頃ヒトは農耕を開始しており、穀物貯蔵庫に余剰の穀物を保存していました。ネコの祖先種であるリビアヤマネコは、そこに集まるネズミを狩るためにヒトに近づき、ヒト側もそれを受け入れることで共生が始まったといわれています。ヒト側からしたら穀物を食い荒らす動物を狩猟してくれるヤマネコの存在はありがたく、ヤマネコ側からしても餌にあります。

けるため両者は Win-Win の関係でした。そのため、ネコはネコのままヒト社会に溶け込むことに成功したといえるでしょう。実際、人為選択が始まり、猫種が確立されたのはほんの数百年のことだといわれています。たれ耳や巻尾など家畜化された動物に共通して現れる特徴（家畜化症候群）も少ないとから、完全に家畜化されていない、半家畜化動物と考える研究者もいるくらいです。一方でイヌは、約3万年前、狩猟採取時代からヒトとの共生が始まりました。それ以降、イヌはヒトと共に働くために、それぞれの労働に適した形質の積極的な人為選択が行われ、多くの犬種が確立されました。このように、ヒトとの共生時期や人為

選択の加わり方がイヌとネコで大きく異なり、イヌの方がより家畜化が進んでいるといえます。



図1：伴侶動物としての地位を確立しているネコ

ネコとイヌの社会的認知能力・コミュニケーションの違い

家畜化は認知能力にも大きな影響を及ぼすことがわかっています。情動反応性仮説によると、ストレス応答性の低い個体を選択することで（＝家畜化）、他者に対する寛容性が高まり、その副産物として社会的認知能力も高まるといわれています（Hare et al., 2005）。イヌとネコを比較しても、イヌの方が社会的認知能力やコミュニケーション能力が高いことを示唆する研究が多いです。まず、イヌの方が視線を用いたコミュニケーションを発達させており、ヒトの視線を手がかりに食物を獲得する課題が得意です。聴覚的なコミュニケーションにもおそらく違いがあり、イヌはヒトの言葉を覚えるといった研究が多く発表されていますが、ネコはイヌと比較するとあまりありません。また、動物自身が発声する頻度もイヌの方が多い、ヒトと積極的にコミュニケーションをとろうとします。このようにイヌは家畜化が進行し、寛容性が高まることで異種間コミュニケーションや社会的認知能力を獲得した可能性が示唆されています。

ネコは「イヌ化」している？

近年、特定の地域で警戒心が低く寛容性の高い「イヌ化」したネコが増加しているのではないかといわれています。もしかすると、特定の地域や環境に適応する形で急速に（自己）家畜化が進んでいるのかもしれません。実際、キツネを用いた家畜化の研究では、他者に対して従順で寛容な個体を選抜していくことで、数十年で警戒心が低い「イヌ化」したキツネを作出することに成

功しています（Trut, 1999）。私は白眉プロジェクトでネコの「イヌ」化現象について、本当に警戒心の低い寛容なネコが特定の地域に偏って存在するのか、それによってヒトとのコミュニケーションや社会的認知まで変化しているのか、またそのメカニズムや進化を促した要因は何なのかを調べていきたいと考えています。



図2：特定の地域に多く存在する、初めて会うこどもに対してもお腹を見せてリラックスするネコ。

ヒトも自己家畜化した動物

ネコの「イヌ」化現象を調べることは、ヒトの理解にもつながると考えています。本研究を進めることで、社会的認知能力の変化やそのメカニズムの解明などの家畜化の本質が明らかになります。実はヒトも、攻撃性の低い個体が選択される自己家畜化プロセスにより、高度に社会的な動物になり、その副産物として知性・言語・文化など「人たらしめる」性質を備えたという仮説が提唱されています（Wrangham, 2019）。家畜化の本質を知ることは、ヒトがなぜ万物の靈長になりえたのかを知る手掛かりになるはずです。

参考文献

1. Hare, B., Plyusnina, I., Ignacio, N., Schepina, O., Stepika, A., Wrangham, R., & Trut, L. (2005). Social cognitive evolution in captive foxes is a correlated by-product of experimental domestication. *Current Biology*, 15, 226-230.
2. Trut, L. N. (1999). Early Canid Domestication: The Farm-Fox Experiment: Foxes bred for tamability in a 40-year experiment exhibit remarkable transformations that suggest an interplay between behavioral genetics and development. *American Scientist*, 87, 160–169. <http://www.jstor.org/stable/27857815>
3. Wrangham, R. (2019). *The goodness paradox: The strange relationship between virtue and violence in human evolution*. Vintage.